
詰め合わせ。

ゆきみね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詰め合わせ。

【Nコード】

N5367T

【作者名】

ゆきみね

【あらすじ】

ふと思いついた小話をちよつとあげる詰め合わせ集です。お暇な時にどうぞ！／ちよつとした息抜きものですので、いつも以上に不定期更新です。／シューベン・しえいも共に未完、執筆中です。

登場人物

サリュエナ・ルー（20）

ウェーブのかかった黒の長髪、クリアブルーの瞳。小さなアンティーク店を自由気ままに経営する女主人。その実は外見を操る魔女。現在はサリア（13）としてティーの護衛の仕事をしている。軍事訓練の経験がある。独身彼女なし。

ロイ・シューベン（32）

シューベン家長男。少し長めだがさっぱりとした茶色い髪と茶色い瞳を持つ童顔で美形な男性。性格は温厚で人当たりがよい。商家として培った情報収集能力は桁違いだが、使い所がおいしいことがある。サリアもといサリュエナにぞっこん。

クイット・シューベン（25）

シューベン家次男。腰まで伸びる茶色い長髪を首の後ろの部分でまとめている。シューベン家のプレーボーイ。誰もが認める美形で女性の陰が絶えない。のらりくらりと気だるげに生きているが、情報収集能力においてはロイに劣らない。

ベル・シューベン（18）

シューベン家三男。赤茶けた短髪。一般的な筋肉量だが、シューベン家の中ではがっしりしている方なため、通称筋肉ダルマ。シューベン家の中で最も常識人で不幸人。一応学生。

クレア・シューベン（16）

シューベン家長女。栗色の髪。サリュエナの経営するアンディー
ク雑貨店がお気に入り。いたって普通の女の子。

ティー・シューベン（14）

シューベン家四男にして末っ子。茶色い短髪。小生意気な口を聞
くこともあるが、尊敬する相手にはその尊敬の念を隠さない。サリ
アのように強くなるため、日々鍛練中。

実は私、

「僕のサリアを知りませんか」

いつ誰がお前のものになった。

思わずヒクツと上がった口角を無理矢理だし、私は「見かけて
ませんね…」と苦し紛れに返した。

私には特定一部の人間にしか打ち明けていない秘密があった。当然特定一部に含まれない彼には秘密を明かしてはいなかった。が、
「サリアはとつても可愛い子なんです。セミロングの黒髪が歩く度に揺れて、クリアブルーの瞳がとてもきらきらしていて。それはそれは男心をくすぐるっていうか…。兎にも角にも将来有望だから、その辺をふらつかせておくと悪い大人に引つかかってしまうかもしれない。そんなことになったら僕はもう自制がきかないんじゃないかと思っています。だってあの子は13にしてあんなに大人びていて、尚且つまだ子供のあどけなさを残していて、とても愛くるしいつたらないんですから。今はペツタンコだけど、それも成長に伴って修正されていくと思っています」

ここまで来たら、もう暴露させてほしくなる。言わなかった私が悪いかっただんです、だからもうやめてください、熱のこもった目で13歳の少女の可愛さを熱弁しないで下さい。13歳でペツタンコなのは仕方ないんです、放っておいてあげてください……。

「だから、見つけたら教えて貰えます？ 今どこで何をしているかと思うと気が気じゃないので」

「え？ え、ええ、わかりました…」

一瞬飛んでいた思考をなんとか引き戻し、私が苦笑いを返すと、愛を語り終えた彼はにつこり笑って石畳の向こうへと去っていった。その男はロイ・シューベン、見た目こそ20代前半だが、真正正銘の32歳独身。

（こんな一面知りたくなかった…）

私、サリュエナ・ルーは大きいため息を吐いた。私は今、ウェーブのかかった黒髪をハーフアップにし、濃紺のワンピースを身にまとっている。見た目の年齢も20歳くらいで、ぼんきゅっぼんとまではないかないものの、大人の女性らしい体つきをしているという自負はある。だからいくらサリアとの見た目に共通性があっても、自分から彼に秘密を暴露しない限り気付かれないうと信じていた。だが、さっきの愛の語りっぷりを見ると、「本当に気づいていないのか」「気づいていないふりをした羞恥プレイ」なのかわからなくなる。後者ならなんて拷問だ。

（こんな仕打ちを受ける位なら、もういつそ言ってしまいたい…！）
サリアとサリュエナは同一人物である、と。

見た目の年齢をいじれる、それがサリュエナの秘密だ。とどのつまり魔女である。魔女とは忌避されるものではないが、希少で貴重な存在であるため、多くの魔女が自分が魔女であることを隠しながら生きているのが現状だ。たまに公にしている人達もいるが、その人達はバツクに大きな貴族が付いたりして、身の安全が保障されているからそういうことが出来る。一般の魔女が自分は魔女だなどと宣言したら、次の日から魔女という存在を慕ったり物珍しさで訪れたりする人々に家の周りを埋め尽くされ、外に出ることもままならなくなるだろう。その中には魔女を自分のものにしようという危ない人間もいるので、尚更公言する者は少ない。

そうやって魔女であることを隠していても、所詮は人間。食いつ持を稼いで生きて行かなくてはいけない。だから大半の魔女は、気合の魔女同士でコミュニティを形成して情報を交換しながら、個々特有の能力を密かに用いて生活していた。

私自身もこの秘密を生かし、今までいろんな仕事をこなしてきた。今回はとある商家の方から、息子の学校での身辺警護を依頼された。

故に一番手っ取り早い方法として、13歳の娘の姿になり、側に控えることにしたのだ。勿論依頼者と自分の間には仲介人がいるので、依頼者も息子も私の秘密は知らない。せいぜい「13歳にしては強い女の子」くらいの認識だろう。曲がりなりにも軍や傭兵部隊を擁している国なので、魔女と疑うよりも、そっちだと認識した方が現実味がはつきりするものなのだ。

こうやって魔女はなんとか存在を隠しながら一生懸命生きている。だから簡単に魔女だと公言するつもりは実際無い。

（でもあんなに幼女に期待をかけられたら、魔女どころか、実は20歳だなんて絶対言えない……）

20歳といえば、まだまだ女も盛りだし、と今までは大した年齢詐欺ではないと思っていた。しかし13の娘に愛を語る男に、実は20歳です！なんて言ったら、とりあえず陽の目を拝めなくなりそうで怖い。

ぶるりと身を震わして、ロイの姿を思い描く。ロイはサリュエナの仕事の対象である、14歳のティー・シューベンの兄だ。身長は170位、少し長めだがさっぱりとした茶色い髪と茶色い瞳を持つ童顔で美形な男性である。性格も温厚で人当たりがよい。実に好ましい男性だ。更に言うなら依頼者の息子の一人なのだから、それに地位のある人間なのだが、一切偉ぶったりしないところも好ましいと思っていた。普段からサリアをティーの護衛兼友人として大事に扱ってしてくれたこともあって、自分がひどく懷いて自覚はあった。

（だけどやっぱりロリコン……）

ロイとヒューの歳が離れすぎなのも結構気になるが、それは問題ではない。問題は20歳近く離れた弟と近い年の娘に愛を語ることである。

サリアで居る時は一切見なかったロイの一面に、引かずにはい

られないサリュエナだった。人間必ず何か隠し事があるものだが、
性癖の隠し事ほど怖いものは無い。年齢詐欺だなんてまだまだ優しい方だ。

実は、「ロイの場合」

ロイの場合

青くなったり赤くなったり、彼女はとても忙しそうだった。自分でも言いすぎかと思ったが、まああの位彼女の肝を冷やさせるのが丁度よかったのだろう。

「あれでばれてないと思っっているんだから、更に愛おしい」

ロイはフツと笑んで、自分の部屋の隅に置いておいた鞆から書類をだし、視線を落とした。

サリュエナ・ルー、20歳。身長162、ウェーブのかかった黒の長髪、クリアブルーの瞳。小さなアンティーク店を自由気ままに経営する女主人。その実は外見を操る魔女。軍事訓練の経験があり、現在独身彼氏なし。

個人情報てんこ盛りの書類には、ご丁寧に全身とバストアップの写真まで付けている。自分で情報収集をしただけある、なんて綺麗な写りだろう。

「家族と同居さえしていなければ僕の部屋にポスターにして貼るんだけど…」

自分を慕う淑女諸君の前では絶対言えないようなストーカー的発言をばろりと落とす。しかし5人兄妹の長男である自分の部屋にはよく弟や妹が、一緒にゲームをしに来たり、勉強を教えて貰いに来たり、怒らせた父親から隠れに來たり、新しい女性から逃げて來たりするものだから、滅多なことではできない。

（…いや、女性から逃げてくるのをわざわざかくまってやる必要はないんだけど…）

1番年上の弟、クイットは女癖が悪い。兄も認める美形だから女

性のおっかけが後を絶たないのは仕方ないとはいえ、もう25なのだから自分でどうにかしてほしいものである。

（ティーはまだ遊び盛りだからいいかな。クレアはまだ16だけど、人一倍勉強を頑張っているから手伝ってあげなくちゃ。ベルは、まあ18歳で反抗期なのは仕方ないね、どこかに鬱憤を晴らせる場所が無いといけない）

兄妹たちの顔と事情をゆっくり思いだし、（やっぱりポスターは無理か）とため息を吐く。こうなったらやはりサリアを直に愛でるしかないのだが、そうすると周囲から「ロリコン」と扱われてしまう。栄えるシューベン商家の長男として、それは少しいただけない。そこでロイがでた最終手段が「本人にそれとなくすほのめかす作戦」だった。最終的にそれとなくどころかはつきりと断言してきだが、たまった愛情を幾分か伝えられたので、自分としては満足である。

サリュエナが存在を知ったのは2年程前。クレアがとても可愛らしい小店があるので行ってみたいと言ったのがきっかけだった。クレアは普段から真面目な子だから、こういう時はわがままを聞いてあげようと、2人で一緒にその店を訪れた。その店は営業日も営業時間も不定期らしく、「今日はラッキーだ」とクレアが喜んでいたので思い出す。店の中にはアンティーク調のアクセサリーやちょっとした家具が置いてあって、中々品の良い店だという印象を受けた。（これならクレアが普段使っていても問題ないね…）

視界に入った蝶をモチーフにした紅色のネックレスに手を伸ばすと、クレアが「あ、」と声をあげてこちらに駆け寄ってきた。

「兄様、それ可愛い」

「ん、気に入った？ 合わせてみる？」

「でしたらこの鏡をお使いください」

急に現れた第三者の声に、ハッと振り返ると、濃紺のワンピースを着た黒髪の少女が立っていた。手には瑪瑙のはめ込まれた空色の

手鏡を持っている。

「あ、でもそれ、売り物じゃないんですか…？」

クレアが恐る恐る尋ねると、その少女はニコツと笑った。

「アンティーク品は使ってこそ、ですよ。それに私がここの主人ですから、気にする必要はありません。さあ、どうぞ」

少女はクレアの前にスツと鏡を差出す。その動作につられるように、手にしていたネックレスをクレアにつけてやると、とても良く似合っていた。

「ああ、とても可愛いですね。お嬢さんの栗色の髪に映えていますよ。もう少し歳を重ねれば、新しい味わいが生まれるでしょうね」
少し年上の女性に褒められたクレアはちよつと気恥ずかしそうにしながら、鏡に映る自分を見ている。

「僕も似合うと思うよ。それを買ってはいかがか」

「いいの兄様？」

「久しぶりの買い物だろう、遠慮することはないよ」

「ありがとう！」

やったあ、と喜ぶクレアを笑顔で見つめながら、少女はクレアに話しかける。

「うちの子を引き取ってくださいありがとうございます。それは着けたままでも構いませんよ。それとささやかですが、こちらのお菓子もどうぞ」

そういつて彼女は可愛らしいお菓子の詰め合わせを手渡した。よく見れば近所にある有名な菓子店のロゴが入っている。「いつも不定期営業でお客様にご迷惑をおかけしていますからね」、とその少女は笑った。

帰り際、まだ歳は18、9だと見えるその少女に、ロイはふと生まれた疑問を投げかけた。

「失礼ですが、どうしてそのお年で自営業を？」

18歳辺りから働き出す子は少くない。だが自分で一から仕事

を始める子はあまり居ない。人生経験が足りない為、リスクが高からだ。

すると少女は、今日一番の笑顔でこう言い放った。

「企業秘密ですよ、お客様」

その花が咲き乱れるような笑顔に、自分の心はがっちり掴まれたのだと、後になってから気づいたのだった。

その後も、クレアと共に何度か店に顔を出して、少しずつ知り合いの立場になった。そして影では自分の持てる力を最大限に活用して、彼女の情報を収集した。魔女だと知った時はその情報をかなり疑ったが、今ではあの店もカモフラージュの一種だったのだと理解している。そして奇跡的に、彼女がティーの身辺警護をすることになった。これはもはや運命だ。

「きつと振り向かせてみますよ」

——ロイ・シューベン、32歳。13歳の娘に恋しようと20歳の女性に恋しようと、年齢差的にちょっと危ないお年頃。素直に好きだと言えない甲斐性なし。現在ちよつと間違った方向から、じわじわサリュエナにアピール中。

実は、「ベルの場合」

ベルの場合

父親と顔を合わせるたびにロイ兄さんの部屋に逃げ込むことを、ロイ兄さん自身は反抗期だから仕方ないことだ思っているようだが、はつきり言わせてもらおう。

「父親が顔を合わせるたびに見合い話を寄越しさえしなければ、自分はいたって素直な人間だ」と。

第一にだ、どう考えても見合い話をもってくるべき相手は俺ではないはずだ。クイット兄さんは女性にもてているので、当面の心配はないだろう。それよりも、我が家にはもっと結婚すべき人間がいるはずではないだろうか？ そう、32歳にして独身貴族満喫中のロイ兄さんだ。その抗議も兼ねて毎度ロイ兄さんの部屋に逃げ込んでいると言うのに、どうして父親もロイ兄さんも何とも言わないのか。こんなのは絶対おかしい。俺はまだ18歳だ。まだ学生だ。どう考えても三十路過ぎた顔面詐欺のロイ兄さんが見合いをするべきではないだろうか。

そこまでひたすら考えて俺はハツとし、それはそれは深く、ふうっと息を吐いた。こうも長々と考えて、実際に行動に移して、実現するならとつくの昔にやっている。

赤茶けた自分の短髪をがりがり搔いて、俺は生産性の無いことを考えるのを一度やめることにした。

「当のロイ兄さんは、最近どこぞの少女の話しかないしな……」
浮いた話の一つもない兄に期待をかけれるとは思えない。だからといってこの歳で結婚したくない自分は、あの阿呆な父親の方をど

うにかしないといけないようだ。だがあの父親、意外にしつこい。粘っこい。相手をするのも面倒くさい。

「……ああ、また生産性の無いことを……」

少し暇になるとそのことを考えてしまふ可哀そうな自分を誰かどうにかしてほしい。とりあえず体を動かすなりして、違うことを考えよう。以前クレアには「ベル兄様は筋肉ダルマね！」なんて笑顔で言われた気もするが、そんなことは気にしない。誰もボディービルダーみたいにむつきむきなわけじゃない。運動部の人間ならあって当然の筋肉量だ。筋肉の無い優男なんて、クイット兄さんだけで十分だ。

（せめて、がたいがいいとか言ってほしかったけど……）

少しブルーな気持ちになりながら、何とか気持ちを切り替えようと、ガタツと椅子を引いて、自室から出るためにドアを目指す。そしてドアノブに手をかけようとしたその時だった。ドアがひとりでに開け放たれた。

「やあベル！ 今日隣町の美女を紹介しよう！ この写真を見てごらん！ なんて素敵……」

「くたばれクソオヤジ！」

もう部屋からも出たくない。

実は、「ティーの場合」

ティーの場合

半年前から、父様が僕に身辺警護の人間をつかせた。最近うちの家も仕事がつまくいっているらしくて、心配した父様が、せめて一番小さい僕につけよう、と提案したのが始まりだった。身辺警護といくらいだから、どんなごついのがくるのかと、自分の茶色い短髪をくるくるいじりながら身構えていたら、

「初めまして、サリアです」

「は、初めまして……？」

背格好も似通った、同じ年くらいの女の子だった。

うちの学校は年齢じゃなくて学力や体力を総合的に鑑みてクラスが編成される。サリアは護衛ということで特別に僕と同じクラスになったけど、普段は全然干渉してこない。転校初日に「ティーの家で働いています」なんて言ったときにはどうなることかと思っただけ、それ以外はふつうのクラスメイトだった。

ただ登下校だけは一緒で、それを他の男子に冷やかされるのが、どうも気恥ずかしかった。

「付き合ってたのかティー！」

「違うって言うてんだろ！」

反対方向からクラスメイトの冷やかしが飛んでくる。違う道を帰るんだから、こっちのことなど気にせずとっとと帰ればいいものを。「誰がサリアなんかとさ！！」

僕はふんつと鼻を鳴らして少し坂になった石畳を駆け下りる。後ろからサリアの軽い足取りが付いてくる。

正直なところ、サリアはどこか大人びているところがあったし、

周りからの冷やかしもあつて、かなりとつつきにくかった。だから登下校の時は、いつも僕が前を歩いて、サリアがその後ろに付いていく、という形になっていた。そうすればサリアの顔を見なくて済むし、八百屋のおばちゃんに挨拶代わりに「仲良しだねえ」なんて言われなくて済む。

「イー……」

（大体サリアは仕事と一緒にいるだけだったのっ！みんなしてさ……）

「ティーってば」

「え？」

自分の名前がずっと呼ばれていたことに気が付く。

「どこ行くの、家、あっちでしょ」

サリアが肩を竦めて、自分が進んでいる方向とは逆方向を指す。

いろいろ考えている内に、全く違う方向へ歩いてきてしまっていたらしい。だがそれを認めるのは恥ずかしくて、僕は一度サリアに向けた顔を、プイツと逸らした。

「きよ、今日はこっちから帰るんだよ！」

「……そっちは逆方向じゃない。それにそっち、変な人とか出るよ」

「いいんだよ！ 大丈夫に決まってるだろ、サリアは嫌ならそっちから帰れば」

言い聞かせるサリアを無視して、一度踏み込んだ裏路地を突き進む。いつも通っている表通りとは違って薄暗いその雰囲気、すぐにこの道を来たことを後悔した。だが今更引くわけにもいかない。

「ティー……」

「なんだよ、サリアは来なくていいって言っただろ。怖いなら一人で……」

「何々、お子ちゃまがこんな昼間から逢引きかなー？」

「……」

突如現れた人影に、ビクツと体を震わし、歩みを止めた。行く手には、見るからに全うな社会人には見えない青年が三人。

「ん、なわけないだろ。そこどいてくれよ兄ちゃん、早く帰んなき

やなんないんだから」

精いっぱい虚勢を張って男達を睨むが、こんな子供の睨みがきくわけもなく、男達がゲラゲラと下品に笑う。

「ガキつてのは本当偉いなあ？日が暮れるまでにお家に帰らないとママにしかられちゃうってかあ」

「そう言うなや、お兄さん達と少し遊んで行けって、なあ？」

「よく見たらいい服着てんじゃねえか。お前、良いトコのボンボンか」

薄汚い手がこちらに伸ばされてきたその時だった。パシンツと音が鳴り、男の手が払われた。いつの間にか自分のすぐ隣に来ていたサリアが、その男の手を払ったのだ。

「薄汚い手で触るな」

「ば、サリアッ！」

こういう時は下手に刺激してはいけないことくらい、僕だって知っている。今は子供の僕とサリアしかないのに、どうやってこの状況を乗り切るつもりなのか。

「こ、のくそがき……」

キレた目をした男がぐわつと拳を振るった。僕は、まずい！とサリアを庇おうとしたが、その必要は全くなかった。

「ぎゃあッ！」

サリアは小さい体をスツと男の脇にすべらせ、背後に回ったかと思うと、男の身体を僕に当たらないように思いっきり蹴とばした。そしてその男の結果を見届けることもなく、そのまま体を反転させ、タツと地面を蹴って、後ろに控えていた残りの男の懐に入り込んだ。そしてどこから取り出したのか、両手の中で鈍く光る鈍器を勢いよく彼らの腹部に叩き込んだ。

「ぎゃっ………！」

「うぐおっ………！」

男達は醜い声をあげて、その場にばたりと倒れ込んだ。そして、サリアはまたその男達の醜態を見つめることもなく、手にしていた

鈍器を僕の方目掛けてビュンツと投げた。

「うわっ！」

ついでに殺られる！直観的にそう感じて思わず両腕を顔の前でクロスさせたが、予想した衝撃は僕には一向に訪れなかった。不思議に思っただけでそろりと目を開けると、その鈍器は、サリアが最初に攻撃した男の顔面に直撃していた。前のめりに倒れ込んだ後、身を反転して起き上がるうとした男の気配を察して、サリアがとどめをさしたのだ。僕は呆氣にとられて、ぽかんとした顔のままサリアに視線をやった。

「……そんな目で見ないで、手加減したから死んでないよ、多分」

だがその時、僕にはサリアの声なんか聞こえていなかった。しばらく呆けた後、ハッと我に返り、サリアに歩み寄って、がしつと彼女の肩を掴んだ。

「デ、ティー？」

「……えよサリア……」

「えと、はい？」

「すっげえよサリア！！ やっぱり警護の人間だけあるんだな！ お前まだ13歳だよな？なのにこんなに強いなんて、すっげえよ！ 一瞬だったじゃんか！ どうしたらこんなに強くなれるんだ？ 僕もお前みたいになれるか！？ 教えてくれサリア！」

「えーと……。とりあえず、帰ろう……？」

「おう！」

今思えば、面と向かって素直にサリアと話したのは、あれが初めてだった。

その後、毎日所構わず「サリア！ 訓練つけてくれ！」とサリアを追いまわしては彼女にブツ飛ばされていたのは、また別のお話だ。そしてそれを羨ましそうに、一番上の兄が物陰から見ていたのも、また別のお話。

いつも、「サリュエナの場合」

差し出されたのは、見るからに美味しそうな手作りダミエだった。ダミエとはアイスボツクスクッキーのこと。チエック柄が特徴の四角いクッキーだ。いや、今はそんなクッキーの特徴等どうでもいい。問題は、「何故、彼が、私に、それを」差し出しているかなのだ。

「……困りますシューベンさん」

「ロイです」

「……困ります、シューベン、さん」

誰が名前を呼ぶものか。私はシューベンに力を込めて呼ぶ。

「ロイです」

「……ですから、シュー、」

「ロイです」

「シュ、」

「ロイです」

「……ロイさん」

「はい、なんでしょう」

もう言い返せない、そう思って悔しさいっぱい名前を呼ぶと、凄く嬉しそうな顔をされた。自分の敗北をひしひしとを感じる。そもそもサリュエナとしての彼との付き合いはそう深いものではない。お客さん以上友達未満だと認識している。となると名字で相手を呼ぶのはごく自然なことなのだ。だが彼は私がサリアとして振る舞っている時と同様に、彼を名前で呼ぶように強いる。そこまで親密な関係ではない彼が、更に言うなら「サリア愛！」の彼が、サリュエナである私に名前を呼ばせる意味が全く分からない。

だが今はそんなことを気にしている場合ではない。今は、この状況を乗り切らなくてはいけない。

「ええと、こういうもの貰うのは困ります……というか、その、「あーん」は、困ります」

そう、何故か突然店に訪れてきた彼が、「プレゼントです」と、クッキーを「あーん」させようとしているのだ。何故自分の店の前で「あーん」を強要されなくてはいけない。プレゼントなら素直に包装して手渡ししてくれればいいのに。

「安心してください、手作りですが、衛生には気を配って作りました。それにきちんと美味しいですよ？」

ええ知ってます、だってそれ私とティーと貴方が、貴方の御宅で作ったんですもの！

（口が裂けても言えませんが……！）

言いたくは言いたく、ムズムズする自分の口に何とかチャックをする。そんなサリュエナの心境を知ってか知らずか、ロイはにっこり笑ったまま、そのクッキーを固く閉ざされたサリュエナの口に押し付けてきた。

「むぐ！」

「今日弟とサリアと作ったんです。可愛い子どもが一生懸命作ったんです、どうぞ食べてくださいね？」

「む、ぐ……」

なんとという脅し文句だ。それにさっき貴方の御宅で餌付けと言わんばかりに食べさせられてきたのに、まだ食べと言っのか……。いや、貴方は知らないのだろうけれど。

「ダメですか？」

（そんな目で見ないで頂きたい！捨てられた子犬のような瞳で見ないで頂きたい！）

罪悪感に駆られる。そうだ、よく考えれば、お菓子と可愛い子ども（、勿論ティーのみ）に罪は無い。幾ら自分がお腹いっぱい、食べさせようとしている相手がロリコンであろうと、食べないのは勿体ないことだ。そうだ、食べ物にも子どもにも罪は無いのだ。罪は無い。

「……いただきます」

大の男の潤んだ瞳に負けた私は、自分をなんとか説得し、小さく

口を開いてその甘い菓子を口内に迎え入れた。

「……美味しいです」

素直に感想を述べると、ロイはまたにっこりと笑った。

「でしたらこれ、全部食べさせてさ、」

「あとは自宅で頂きますので！」

勢いよくロイから30枚近くクッキーの入っている袋を取り上げ、私はまるで飛ぶように店内に逃げ帰った。

もうこれ以上は許してください！

実は、「クイットの場合」

シューベン家のプレーボーイことクイット・シューベンは、腰まで伸びる茶色い長髪を、首の後ろの部分でまとめた、誰もが認める美形だ。そして今も、つい1時間前に別れを告げた女性から逃げたところだった。

「いつか刺されそうですよね」

「クイット兄なら有り得るな」

シューベン家の客間のテーブルでティーとボードゲームをしながら、呆れ気味にクイットに声をかける。するとソファに深く腰掛け、いた彼は「ええ？」と気の抜けた声をあげた。

「二人とも、ちよつと失礼じゃないかい？ 幾ら私だつて刺されるほど酷いことはしてきていないよ。さっきだつてきちゃんと別れを告げたのに、あつちが何だか結婚する予定だったとかなんだとか勘違いし、」

「あ、チェックです、ティー」

「え、嘘！？ ちょ、サリアってボードゲームも強いのかよ！？ 聞いてないし」

「私の話こそ聞いてないよね？」

反応を返して貰えなかったクイットは、構ってくれと言わんばかりにティーに引つ付けてくる。しかしティーも慣れたもので、ぱつさり兄を切り捨てる。

「クイット兄の女性関係は日常茶飯事過ぎて飽きた」

10代前半の少年にここまで言わせるのだから、彼の遍歴はどろどろの長編小説が出来上がるほどに素晴らしいものなのだろう。実にいい反面教師だ。当のクイットは、今度は私に助けを求めている。

「サリアちゃん！ なんとか言っておいて！」

「……ご愁傷さまです……？」

「いや、そうじゃなくてね？」

もういいよーだ、とクイットは又深くソファに腰かける。横目にクイットを見遣ると、なるほど、気だるそうにソファに身をゆだねるその姿も、なかなか様になっている。世の女性は幾らクイットがダメ男だとわかっていても、この美貌にやられてしまうのだろう。

（可哀そうなのはクイットさんじゃなくて世の女性だな。私は絶対こんなダメ男にはひっかかりませんように……）

心の中で切に願いながら、私はティーとの再戦に思考を戻した。

きやつきやつとボードゲームにいそしむ弟とその護衛をちらりと見る。傍^{はた}から見れば、とても仲のいい同世代の男の子と女の子だ。微笑ましい光景だろう。

（とてもそういう匂いはしないけれどねえ……）

ティーが「たまには家で遊ぼう」と連れてきたその子からは、とても10代前半の女の子と思えない香りがした。成熟した女性の香りだ。果実のように甘くて、男を誘う香り。

（あんな子どもから、どうしたら香るのかなあ）

マジマジと見つめると視線がばれそうなので、ソファに深く腰掛け横目で観察しつつ思考する。だが答えは簡単には出ない。

（ふむ……。まあティーがサリアちゃんに抱いている感情は恋愛ではなさそうだし、暫く放置しても大丈夫かなあ……。どっちかって言うところあの目、尊敬の念だし）

熱心にサリアの一挙一動を観察しているティーを見て、思わず苦笑が漏れた。するとその笑いに気付いたのか、サリアがふっとこちらを見る。

（おっと）

「ん？ 私もやつと混ぜてくれるの？」

おどけて身を乗り出して見せると、「今僕の番！」とティーには

ねつけられた。やれやれ、と肩を竦めてソファに身を戻す。サリアもそれ以上気にする様子はなく、またティーとのゲームに戻っていた。そして5分も経たないうちに、サリアの後ろにあるドアが開け放たれた。

「ここに居たんですかティー、家庭科の、」

喋りながら部屋に入ってきたロイの姿を確認したサリアと、ティーとボードゲームをしていたサリアの姿を確認したロイが、同時に固まった。両者の異変に、（ん？）と思った時には、両者共すぐに平常を取り戻していた。

「そう、家庭科の実習の練習をしたいと料理長に頼んだのは貴方でしょう、忘れていたんですか？」

「あ、そうだった！」

ティーが忘れてた！とバツと立ち上がる。

「全く……。ほら、厨房に行きますよ。今日はクツキーを焼くそうです。サリア、貴女も一緒にどうですか」

「え？あ、私なんかお邪魔してよろしいのですか……？」

「ええ、是非に」

控え目なサリアの反応に、満面の笑みでロイが返事を返した。そして時は金なりと言わんばかりに、早速3人そろって厨房へと旅立っていった。勿論ボードゲームの片づけはこちらに押し付けて。

仕方なくボードを整理しながら、ロイとサリアの反応を反芻する。

（あれは何かあるよねえ……）

あの笑顔は弟の友達に向ける笑顔じゃない。そしてサリアのやや引きつったあの顔は、友達の兄にも、護衛者の兄にも向ける顔じゃなかった。

（例えるなら、大好きな女性こに向ける笑顔と、その好意にひいてる顔こって感じ）

しっかりとボードを元の箱にしまい、よいしょ、と脇腹に抱える。確かこれはティーがロイから借りていたものだ。ならば私がきちんとロイの部屋に返すのが責務だろう。

（いつもいつも、私ばかり女性関係に悩むのは、フェアじゃないよね）

知りたいと思ったら、知らなきゃ気が済まないのはシューベン家の性分である。幸い、クッキーが焼けるまで、まだ時間はたんとある。

ところで、「ベルの場合2」

クレアのお菓子の買出しに付き添って、俺は今、街で有名な菓子店に来ている。本来なら厨房の人間に頼んで買ってきてもらえばいいのだが、やはり自分で選ぶのが楽しいらしい。今日は何の予定も無かったから別に構わない。しかし巷の女子に人気のこの可愛らしいピンク壁の菓子店で、18の男が妹と2人きりで買い物している図は、なんとも言い難い。

「……クレア、外で待つてる」

「うん、先に帰ったりしないでね、ベル兄様」

「心配しなくてもボーっとしてる」

クレアの許可を得て、広い店の外に出ることにした。しかし店の玄関に近づいたところで、ドンツと目の前の女性にぶつかった。

「つと、すみません！」

自分の肩に当たって、濃紺のワンピースを着た小柄な女性がよろけてしまい、慌ててその女性の肩を抱いた。

「あ、ありがとうございます。前を見ていなくて…すみません」

女性は体勢を立て直し、ぺこりと頭を下げて謝る。お菓子を入れる編みかごを両手で抱えている姿は、まるで花摘みから戻ってきた農家の娘のようだった。

「ベル兄様！ もう、兄様は筋肉ダルマなんですから気を付けてください！」

一連の流れを見ていたクレアがトトトツと駆けよって来て、女性に謝る。

「うちの兄様がすみません、お怪我はありませんか？」

「いえ、大丈夫です……って、あら？ クレアさん？」

「サリュエナさん！」

女性の顔を確認したクレアが嬉しそうに女性の名前を呼ぶ。

「クレア、知り合いか？」

「はい、アンティーク雑貨屋さんを経営してる、サリュエナさんです。サリュエナさん、こちらの筋肉ダルマが兄のベルです」

また筋肉ダルマと口にして、クレアがサリュエナさんに紹介をする。筋肉ダルマと連呼されると、仮に悪意がなかったのだとしても段々傷ついていくということをこの妹に知ってほしい。

「そうだったんですか。初めまして、私サリュエナと申します。いつもロイさんとクレアさんにはご贔屓にしてもらっています」

そんな思春期真っ盛りの男の気持ちなど知るはずもなく、サリュエナさんはふわりと笑って自己紹介した。こちらで慌てて自己紹介する。

「ベル・シューベンです。いつもうちの兄妹がお世話になってます。お怪我が無くて良かったです」

「私の方こそ、きちんと前を見ていなくてごめんなさい。今日明日久しぶりにお店を開ける予定だから、張り切って買い込んでしまつて」

サリュエナさんは恥ずかしそうに笑う。

「今日明日、お店お開けになるんですか？」

クレアがきらきらとした目で問いかける。どうやらサリュエナさんがやっているお店は不定期営業のようだ。

「はい、宜しければ来てくださいね」

ぱああつと笑顔の広がったクレアが「はい！」と返事をしたところで、「サリュー！会計するなら早くしないと、きちんと列に並んでもらうわよ！」とレジの方から声がかかった。

「お店の方も知り合いなんですか？」

「ええ、私の人生のお師匠様みたいな方です。ちょっと口うるさいけど、いい人なんですよ」

「一言多いよ、サリュー！」

「……そして地獄耳なんです。もう、今行きますから！」

そしてサリュエナさんがレジに向かおうとした時だった。

「今日明日はお店開いてるんですね」

サリュエナさんの肩がビクンツとはねた。

「こんにちはサリュエナさん、こんなところで会えるなんて奇遇ですね」

「なんで居るんだ、ロイ兄さん」

「なんで居るのかしら、ロイ兄様」

我らがシューベン家の長男、ロイ兄さんが満面の笑みでサリュエナさんの後ろに立っていた。何故満面の笑み。

「ロ、ロイさん。奇遇です、ね……？」

語尾に疑問符をつけ、サリュエナさんがやや引きつった顔でロイ兄さんに笑顔を返す。

「ええ、奇遇ですね。今日明日明後日は三連休で学校もないでしょう？ ティーもサリアに会えなくて暇だろうと思って、一緒に街に遊びに来ていたところなんです」

誰も聞いていないのに、ロイ兄さんが満面の笑みを維持したまま「何故ここに居るのか」を説明する。しかしティーの為と言う割には、ティーの姿がない。

「ロイ兄さん、ティーは？」

「あれ、居ない？」

はた、と気付いたようにロイ兄さんが辺りを見回す。しかし店内にティーと思しき少年の姿はない。クレアが「え、ロイ兄様、もしかして置いてきたんですか!？」と叫ぶ。「そうかも」とロイ兄さんが暢気に返す。

(この人は一体街に何をしに来たんだろう……)

ロイ兄さんに代わって慌てるクレアを落ち着かせ、俺は深いため息を吐いて、今頃1人でわたわたしている弟を探すために店を出たのだった。

ティーはロイが街中を歩きまわる為だけの口実だった事を知っているのは、家で留守番している次男と、ティーを口実に使った長男本人だけだった。

ところで、「サリュエナの場合2」

金色の髪を乱れなくピッチリとまとめあげ、クリーム色のワンピースに白いエプロンを身にまとい、忙しげに菓子店を仕切るその女性、歳は35歳くらいで、少しきつい顔立ち。それでもそのハキハキした性格から、老若男女問わず好かれている。その人の名前はルル・マホット。私サリュエナの人生の師匠にして、魔女としての師匠である。

彼女が使うのは「人を幸せな気持ちにする」魔法。大きく使えば麻薬のような効果を発し、小さく使えば食後の甘いデザートのような効果を発する、なんとも面白い魔法だ。彼女はその魔法を小さく使い、店で作るお菓子にちよつと振りかけて売っている。だからこのルルの経営する菓子店は、ルルが魔女である事を隠しながらも、「食べると幸せな気持ちになれる菓子店」として巷で有名だった。

「で？ さっきのが噂のロリコンのお兄さん？」

自分の店に帰ろうとしていた私を呼び止めたルルが、店の休憩室に私を連れ込み、唐突に切り出した。

「ああ、はい。ロイ・シューベンさんです……」

すっかり顔なじみになったお店のスタッフさんに出してもらった紅茶をすすりながら、私は少し遠い目をする。やはり彼は一目みただけではロリコンに見えないのだ。私も暴露されるまで分からなかったのだから当然だが。

「へええ？ 私にはそう見えなかったけど？ どっちかっていうとあんたの事好いてる感じだった」

好いている、とはどういう感じなのかわからないが、私は私自身の意見を述べる。

「でもあの方、サリアの事が気になって仕方ないって……」

「でも私にはそう見えた。ああ、もしかして、サリアとサリュは

同一人物ってバレてるんじゃないの？だからサリアにもアタックしてるのか？」

ルルは自分の店の茶菓子を頬張りながら、楽しそうに笑った。私は予想だにしていなかった返しに、「まさか」と苦笑いする。

「だって私、覚えてる限り、バレるようなことしてませんよ？」

「でもあの人、シューベン家の人なんでしょ？　だったらバレても不思議じゃないと思うけど？」

「え？」

シューベン家だから不思議ではないという言葉に、私が何の事だかわからない、という顔をしていると、ルルが逆に「ええ？」という顔をして驚いた。

「シューベン家は最近めきめき力をつけてる商家よ？　商家に最も求められる能力の1つが情報収集能力じゃない。だからこそ、間接的ではあるけど、魔女に護衛なんて大それた依頼ができたんだと思わない？　そんな情報収集能力があれば、バレててもおかしくないでしょう？」

その言葉に、私は背筋がゾクツとした。

（まさか、まさかとは思うが、個人情報、収集されていますか…？）
そんな私の不安を読み取ったかのように、ルルはティーカップを口元に運びながら、にっこりと笑う。

「幾ら私達が魔女という素性を隠していると言っても、私達は世間の方々から魔女として仕事を請け負ってるんだから、完全に隠し通せることなんて出来ないでしょ」

そう、そうなのだ。魔女として世の人々と付き合っていけば、必ずどこかに隙が生まれ、綻びが生まれる。いくらこちらが簡単にバレないように色々と手を回しても、桁違いの情報収集能力を持つ者に調べられれば、バレてしまうこともある。

「じゃ、じゃあ、じゃあですよ！　仮に、ロイさんがサリアとサリュエナの事が同一人物だと知っていて、且つ私の事を好いてくれているとします。それならなんで、なんで最初から今までサリアだけに

「アタックしてるんですか!？」

「ロリコンだからじゃないかしら……」

「やっぱりそうなるんですね……!!」

この悩みを解決したいが為に発した素朴な疑問は、最初の「ロイさんはロリコン」問題へと回帰させるだけだった。

ついに、「ロイの場合3」

弟に言われてやっと気づいたことがある。サリュエナ自身に好きですと言つて、それからサリアの秘密を知っているといった方が、格段に手っ取り早かつたのではないかと。

「……」

後の祭りとはこういう事を言う。

「だからロイはサリュエナさんに良い顔されないんだよ？」

「……」

「そんな方法でアプローチとか、それってサリアちゃんの事はバレてないと思ってるサリュエナさんにとっては、「この人ロリコン……！？」ってなつて当然じゃない？」

「……」

「大体さあ、なんでそういう風にアプローチしちゃうかなあ？ 普通に考えてみてみてもさ、好きな子の前で、他の女の人のことをめちゃくちや褒めるって、有り得ないでしょ？ ロリコン疑惑が生まれたなら尚更近づき難いじゃない。これだからロイはいつまで経つても結婚で、」

「もうその辺でやめてくださいクイツト、世界がにじんできました」
そつと目頭を押さえて、自室の机に突つ伏す。机周りには仕事の書類と個人的な書類、そしてサリュエナに関しての調査書が散乱していた。どれもこれも、自分がしばらく外出していた間にクイツトがやったものだ。まさかこんなに散らかされた上に、サリュエナの書類を発見されるとは思っていなかった。「前回は見付けられなかったんだけど、やっと今回見付けたんだ」と、満面の笑みで喋るクイツトを見て、一見のらりくらりと生きている弟をなめていたことを反省した。

「今からでもきちんと話してみれば？ 何もしないでこのままロリコン疑惑を深めていくよりは、いい方向に進むかもよ」

まあ落ち込まないでよ、とクイットがポンポンツと肩をたたいてくる。

「それにサリュエナさんがダメだったとしても次があるじゃない！」
「サリュエナさんが好きなんです……」

励ましのつもりで掛けられたであろう言葉に、更にがつくりと肩を落とす。お付き合っている女性が次から次へと変わるクイットにしてみれば、AがダメならB！の思考で全く構わないのだろう。だがクイットと違って恋愛慣れしていない自分は、サリュエナに振られてすぐに次の人を好きになることは出来ない。きっとダラダラとサリュエナへの想いを引きずる。それに直ぐに次へと行動が出来ていれば、この歳まで独身など貫いていない。

「32歳まで独身引きずるところなるのか。私も早い内に身を固め方が いい のかもしれないね」

「クイットは結婚する前に刺されるから心配いりませんよ」

ボソツと呟かれた言葉にボソツと嫌味を返してみるが、クイットは気にせず先ほどの話を再開する。

「ロイの話に戻すけど。取りあえず、1度きちんとサリュエナさんに秘密を知っていることを話した方がいいね」

「そう、ですね……」

「何、そのやる気のない返事。私がサリュエナさんにアタックしに行ってもいい、」

「来週の土曜日辺りはどうでしょう、来週の土曜日も午後からお店開くらしいのですが！」

「じゃあ来週」

クイットにだけは手を出されるわけにはいかないと焦って返事をしたせいで、一世一代のプロポーズの日付が、弟の掌の上で決められていた。

こんなまぶしい笑顔を見せられて、次は何をされるのだろうと、気が気ではない休日の夜だった。

変化は突然に

都会の喧騒を離れ、田舎で1人暮らし。野菜類は自給自足。お肉や魚等は約2キロの道のを経て、集落までまとめ買いをしに行く。自宅であるウッドハウスの周りには広い草原、穏やかに流れる大きな川。その川の向こうにはまだ峰に雪を残す、雄大な山。お隣さんもお向かいさんも居ない。こんな山奥でも、電気、ガス、水道、ネット環境は完璧。だから食料を確保しに出かける時以外はずっとこの家に引きこもっていることが可能。

そう、これこそ私が夢見ていた生活。誰にも邪魔されない、夢の空間。都会で生まれて都会で育ち、都会の喧騒に嫌気が差していた私に与えられた、至福の一時。

しかし平和というものは長く続かないのが世の常で。そんな私の生活を乱す、ふざけた3人組が川向こうに引っ越してきた。

全員変人という、ある意味最高な3人組が。

挨拶に

「あ、れ……？」

いつの間にか、川の向こうに大きめのウッドハウスが建っていた。煙突からは煙が上がっていて、既に人が住んでいることが見て取れる。窓越しにそれを発見した私は、眉間に皺を寄せた。先ほどまで睨めっこしていたパソコンの前から立ち上がり、窓辺によって凝視してみるが、その光景は変わらない。

「うわあ、いつの間に……。私何日外に出て無かったっけ。あの家運んできたのかなあ……。いや、そうだよ、運んで来たに決まってるじゃない。組み立てていた期間ずっと気付かなかったとか、いくら引きこもりとは言え、そんな筈ないし、有り得ないし！」

無理矢理自分に言い聞かせ大きく頷きながら、そそくさとキツチンへと移動し、業務用かと見紛う大きな冷蔵庫に手を掛けた。

「……おおっ？」

しかしその冷蔵庫の中はすっからかんだった。この大きさの冷蔵庫が空とは、本当に軽く数週間は引きこもっていたのかもしれない。ネット上の仕事をしているから滅多に外に出る必要はないと高をくくっていた。

「いや、しかしこれはまずいぞ。食料が尽きたらさすがに死ぬ……」

こんなところで死んだら、そのまま白骨化間違いなしだ。気付いてくれる人が居ると思えない。

「うう、仕方ない。久々の日光浴兼食料確保の外出ついでに、私の夢の世界をぶち壊しそうなお向かいさんに挨拶しに行くか……！」

せっかくの悠々自適な生活にひびが入るのは残念だが、だからといって一度目に入ったものを無視するわけにもいかない。それにこのままいくと、人間との会話方法を忘れそうなので、これは久しぶりに人語を交わす丁度良い機会だ。

ぐーっと背伸びをして身体をほぐしてから、とりあえずシャワー

を浴びに行くことにした。最後に入ったのがいつか、ちょっとばかり記憶があやふやだったから。

「うわぁ鳥さんと豚さん」

お土産にと集落で買ってきた赤ワインを片手に、お向かいさん家の前まで来ていた。自宅の窓からは見えなかったが、お向かいさん家の影になるところでは、数羽の鳥と何匹かの豚が飼われていた。多分食用。

（そついえば最近お肉食べてなかったな、美味しそう……）

「って違った！ 挨拶しに来たんだった！」

危うく本能に流されるところだった。爛々と輝いていた自分の目を落ち着かせ、低いところで2つに結わえた黒髪を揺らしながら、木製の階段を上って玄関のドアをノックした。木製のドアは、コンコンとノックを気持ちよく反響させる。すると中から「はあい、ちよつと待ってくださいねー」と、若い男性の声がした。

（男の人、なのか……）

自分の格好を確認する。チェック柄のシャツと黒のショートパンツ。先程自宅で着ていた、びろんびろんの部屋着より100倍マシだ。大丈夫、多分、大丈夫だろう。そうやって不安にしていると、「お待たせしましたー」と、ドアがギィツと外向きに開いた。ハッとなって、咄嗟に笑顔を作って挨拶しようとした。

「こんにちは、川向かいに暮らしているシエンで、」

「ああなんて可愛い方なんですか！！」

突然熱い抱擁を受け、一瞬意識が飛びかけた。

大変だ、お向かいさんは変態さんだっ！！

お向かいさん達は

「こらこら、何してるんだい君は。ごめんね、驚いたでしょう」

訳が分からず混乱していると、奥から更に人が現れたようで、突然抱きついて来た男をベリツと引つ剥がしてくれた。変態から解放され、私は自由になった頭を勢いよく下げてお礼を言う。

「いえ、大丈夫です！　ありがとうございます」

「ふふ、悪いのはこいつだから気にしないで」

男性がゆるりと笑った。少し視線を上げると、男性の腰辺りが視界に入る。その服はあまり見かけない独特な服だった。たつぷりとした柔らかな白の1枚布で身を包んでいて、黒の腰帯で布の流れを調整している。

（民族衣装とかなのかな）

そう思いながら更に視線を上にあげる。すると男性の半円状に肌蹴た胸元からは、鎖骨に沿うように描かれた棘トゲの刺青がのぞいていた。

（……やばい！？）

身体に刺青を入れている人など、「その手の人」が大半だ。私は焦りから反射的に顔を上げて、そして硬直した。

危険人物の香りがする男性は、長い黒髪を後ろで結わえ、耳の高さまでのびる前髪を真ん中で分けていた。案の定顔、右頬にも棘の刺青が入っている。しかしそれだけならまだ吃驚して恐がるだけで済んだ。その男性はその手の強面という予想に反して、顔貌の整った、柔和な面持ちの美青年だった。

「どうしたのかな」

「え、あ！　すすす、すみませ……！」

固定していた視線を逃げるようにバツと横に逸らして、私はまた固まった。視線の先には、さっき私に抱きついていただろうと思われる変態さん。その変態さんはワイシャツに黒のベストとズボンで、

まるで紳士のいでたちをしていた。そして金の短髪に包まれたその顔もまた、乙女を撃ち抜く美形のものだった。

「うえ、え!？」

急に現れた美青年2人に驚いて、思わず後ずさった。すると当然、後ろにあつた階段との境目を踏み外し、

「あぶなっ……!」

後ろからボフツと誰かに抱きとめられた。声は男性だった。この家の住人の内の1人かもしれない。

「あ、ありがとうございます……!」

慌てて振り返ると、その人は首元から斜め下へとボタンの付いたの白い上着に、黒いスラックスのようなズボンを履いていた。東国に、こういう服を今でも着る人がいたな…等と思いつつ、その男性の顔に視線をあわせると。

「……またっ!？」

ウェーブのかかった顎までの白髪と、顔の脇の1本だけ長い3つ編みが特徴の、美青年だった。

自己紹介を

「ああ、お向かいさんだったんだね」

「え、あ、はい……」

刺青の男性が微笑みながら、「どうぞ」とティーカップを目の前のテーブルに置いた。

あの後、半ば強制的にお向かいさん家のリビングに連れ込まれた。木目を基調とした彼らのリビングには大きめの白いソファが向かい合わせに置いてあった。部屋の奥側のソファ周辺に美形3人が陣取ったので、流れでもう一方のソファに腰掛けてしまった。

そして今、私は視線を泳がせながら、出されたお茶をすすっていた。4人の間に会話は無く、ただ静かにお茶をすすっているだけなのだ。

「え、えと。お名前、うかがっても良いですか？」

段々居たたまれなくなってきたので、何とか話題を提供してみた。すると先ほどの紳士の顔をした変態さんが、恥ずかしそうに口を開いた。彼はいつの間にか私のソファの右横に回っていた。

「なんていう名前だと思いますー？」

「……チャーリー？」

とりあえず何か答えるべきとの場の空気を読んで、適当に答えてみた。白髪の男性が「何故チャーリー」と突っ込むが、チャーリーと呼ばれた変態さんは、「正解！」と嬉し恥ずかしそうに答えた。それに白髪の男性が「嘘言え！」と噛み付く。

「え、いやいや、私だって何となく、言ったんですよ？ え、違いますよね？ あの、訂正してくださいって全く構いませんので！」

私が慌てふためいていると、向かいのソファに静かに座っていた刺青の男性が「あはは」と笑った。

「なに言ってるんだい、キトル。彼はむかーしむかしからチャーリーだろう？ あ、因みに私はファソンだ、よろしくね」

さりげなく自分の自己紹介をして、刺青の男性、ファソンは笑った。（やっぱり柔和な面持ちの美形さんだなあ）なんてことを考えていると、ファソンの後ろでつまらなそうに佇んでいた男性が口を開いた。

「俺はキトルだ」

そう自己紹介したのが、さっき転びかけた時に助けてくれた白髪の男性。彼は常に眉間に皺がよっていて、少しばかり強面の美形だ。取りあえず彼の方を直視しないようにしながら、覚えた名前を声に出して確認してみる。

「チャーリーさんにファソンさんにキトルさん、ですね」

「間違ってもキルトとか呼ぶんじゃないぞ」

キトルが眉間に皺を寄せたまま微笑む。何故彼は人の考えていることが分かるのだろうと、私は苦笑いした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367t/>

詰め合わせ。

2011年10月12日03時02分発行